様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｈ０１６１６

研究課題名（和文）朝鮮半島の冷戦下都市復興における東西建設援助の建築史的研究

研究課題名（英文）Architectural Historical Study on Construction Assistances by the Eastern Bloc Countries and the Western Bloc Countries in Urban Reconstruction on the Korean Peninsula during the Cold War

研究代表者
谷川　竜一（Tanigawa, Ryuichi）

金沢大学・新学術創成研究機構・准教授

研究者番号：１０３９６９１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、朝鮮半島を中心に、20世紀半ばの国際建設援助の概要をグローバルな観点から把握できた。特に北朝鮮の都市復興に強く関与したソ連や東ドイツの建設援助について多くの発見を得ることができたと同時に、韓国に対してなされた国際建設援助についても、その象徴的なプロジェクトを把握し、情報収集と考察を深めることができた。全体としては、冷戦構造の確立と関係付けながら国際関係史的側面から建設援助を考察した成果を、多角的に出すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
北朝鮮に関する歴史理解は非常に手薄であったが、本研究ではそれを国際関係史の中に位置付けながら、より深化させていく学術的貢献を果たすことができた。特に韓国と日本の関係をそこに接続しつつ、さらにグローバルな建設潮流と関係付けて議論を行った。こうした作業を通じて、戦後の東アジア建築史の空白を埋めながら、それを世界史の流れと重ねて理解していくための学術的な視座の構築に、多少なりとも資することができたのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：Through this study, we were able to gain an overview of international construction assistance to the DPRK and ROK in the mid-20th century. In particular, we were able to make many discoveries regarding Soviet and East German construction assistance in the urban reconstruction of the DPRK, and at the same time, we could deepen our understanding of the international construction assistance provided by Western Bloc countries to the ROK by identifying its symbolic projects. Furthermore, we could produce results from the historical aspect of international relations by relating construction assistance to the establishment of the Cold War structure.

研究分野：近現代建築・都市史

キーワード：北朝鮮　韓国　冷戦　植民地　建築　都市

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、それ以前に研究代表者らが進めていた基盤研究 B（26289221、旧基盤研究 B とする）の成果を踏まえて立案したものである。

そもそも日本における朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の都市・建築史研究は、公的資金を用いた研究の難しさや、不可能に近い現地調査、および一次資料不足のため皆無に等しかった。そうしたなかで、代表者らは旧基盤研究 B を通じて研究実践活動を開始した。それは学術の空白地帯を大まかに埋めていくような作業であったが、仮説と検証、調査と考察を繰り返しながら、北朝鮮研究を進めていくことには 2 つの主要なアプローチがあることに気づいた。

一つ目は、北朝鮮の都市・建築史をナショナル・ヒストリーの枠組みで描き出すことで、北朝鮮の都市・建築の固有性や歴史性をはっきりと認識することである。通常こうした研究は、自国の建築史家が行う場合が一般的に思われるが、同国との学術交流は極めて限られているために、その状況を把握することすら容易ではない。旧基盤研究 B でわかってきたことは、北朝鮮の一国史観的な都市・建築史はあるにはあるが、基本的には金日成などを主語とするトップダウンの歴史叙述が中心であるということであった。したがって、これに対して国民たちのリアルな生活圏で織り成される都市・建築史をいかに把握し、「金日成」や「党」といった大きな語りを刷新していくこと――つまりはボトムアップの歴史を支配的な歴史にぶつけて歴史全体を刷新していくことが必要であった。旧基盤研究 B ではこうしたアプローチを重視し、研究を進めた。

二つ目は、視点を水平方向に世界大に大きく広げるとともに、歴史的にも建国以前の日本植民地期にまで伸ばし、国際的かつポストコロニアルな文脈も踏まえた北朝鮮都市・建築史探究の道筋である。1945 年の植民地支配からの解放から朝鮮戦争までの北朝鮮は、主にソ連の影響を強く受けながら、都市・建築を建設してきた。そして朝鮮戦争で国土が焦土となった後、その復興過程においてはソ連だけでなく旧東側諸国からの国際的な援助が入った。つまり、北朝鮮の歴史はソ連ほかの旧東側諸国との関係の下で把握できる部分があるわけである。また、多くの都市は焦土となったとはいえ、植民地期の日本の計画をある程度下敷きにしながら都市復興が行われたことも見えてきた。このような国際関係や植民地期の歴史を基層の一つとして考えることで、上で述べたような一国史観な北朝鮮の歴史を、空間的・時間的に向かって開いていく作業が、もう一つの道筋となるという認識を深めた。

これは旧基盤研究 B を進めていた代表者らだけでなく、韓国や欧米諸国で進んでいた北朝鮮都市・建築史研究の多くも同時期に同じような認識枠組みを抱きつつあったと考えられる。代表者らの旧基盤研究 B は、北朝鮮都市・建築史の通史的な観点から、大まかな概要を把握できたとともに、研究最終年度にこの二つのアプローチを絡め直し、共同研究の枠組みや目的をいかにして新しい研究として構築するかということを検討した。特にポイントとなったのは二つ目の国際性や歴史的文脈である。それは単に北朝鮮という未知の国に対する好事家的好奇心を満たすのではなく、むしろそこを冷戦下の国際秩序や 20 世紀の覇権争いの重要な結節点と見なすことで、北朝鮮の都市・建築史から世界を見通すような研究を設立できないかということであった。そうした背景と問題意識から、国際建設援助を主な視角として、本基盤研究 B を設定した。

２．研究の目的

本研究は、朝鮮戦争後の北朝鮮・韓国でなされた東西両陣営による建設援助の実相を解明し、それらが第二次大戦後の戦災都市復興や冷戦下の国際援助競争のなかで定型化してきた歴史的手法であることを実証的に解明することを目的とした。これは、北朝鮮の都市・建築史を国際建設援助という観点から把握するというだけでなく、韓国というファクターを加えて、朝鮮半島全体の歴史まで視野にいれたものであった。

そもそも南北朝鮮に対する 1950～70 年代の建設援助は、東側はソ連・東ドイツ、西側はアメリカ・日本が中心となり、対象国の政府庁舎から水力発電所まで多岐にわたるメニューで編成された。それらは各都市空間や地域空間の基盤を形成する極めて重要なプロジェクトであったが、研究蓄積の不足や一国史観を重視する風潮のなかで看過されてきた。少し視点を広げてみればわかるように、北朝鮮に限らず東アジアの多くの国は、脱植民地化と国家建設・復興を同時に経験するなかで、東西対立に巻き込まれてきた。このことを鑑みれば、東西各陣営において国際政治・経済上極めて重要な役割を持っていた国際建設援助こそが一つの焦点となる。特に朝鮮戦争は東アジアに持ち込まれた最も先鋭的な東西対立であり、その復興はソ連・東ドイツなどからなる東側諸国、アメリカ・日本などからなる西側諸国によって大規模に推進された。しかもそこには東西両陣営内の最新かつ編成された建設知が投入されており、それは推知するに第二次大戦後のヨーロッパや日本の占領・復興で試行されたソ連やアメリカによる都市・建築的な技法や、それを通じた経験に端を発していると考えられた。こうした建設援助の特徴や流れの解明を目的に掲げることで、結果的には北朝鮮の都市・建築史を、世界史に接続させつつ明らかにできるだろう。また、それは東西対立を前提として考察する以上、東側の北朝鮮に対して西側の韓国も視野に入れることで、より対比的に考察することが可能になるはずである。こうした問題意識、研究関心をもとに、本研究は朝鮮半島の国際建設援助を軸にしながら、その出自や変遷を歴史的

かつ横断的に理解していくことを目的とするとともに、北朝鮮の都市・建築史をそのなかに、韓国というファクターを加えつつ位置づけ直すということもまた意識していた。

３．研究の方法

具体的な作業としては次のような方法を採り、研究を進めた。

そもそも北朝鮮や韓国の建築史を個別に見ていても気付かないが、1950～70 年代の朝鮮半島はいわば東西両陣営のモデル都市・建築のショーケースという側面がある。この認識の下、研究前半に北朝鮮や韓国に対する建設援助の実相把握、そして後半は東西両陣営の建設援助技法がいつどこで生まれ、どのようにして朝鮮半島に入っていったのかという変遷過程の理解を目指すこととした。

まず北朝鮮や韓国に対する建設援助の実相把握に関しては、北朝鮮で進められたソ連や東ドイツを中心とした援助の把握を、ロシアやドイツの文書館などで行った。代表者や分担者は個別にロシアやドイツで現地調査し、旧東側諸国が行った建設援助に関する政治的背景を理解するともに、関連文書などを収集した。なかでも大きな成果となったのは、北朝鮮からソ連へと留学した建築専門家に関する研究であり、彼らの役割や具体的な活動内容にアプローチするとともに、そうした人物に関する個別研究を深めることができた点である。また、韓国については現地調査を通じてそうした援助が行われた地域を訪問するとともに（主にソウルや釜山）、日本の建設関連協会での資料収集や旧西ドイツの政治・経済資料の読解を通じてその韓国援助に関する理解を進めた。さらに、北朝鮮や韓国の植民地期の資料を日本および韓国で収集するとともに、日本が植民地期に行った大型開発の思想的源流の解明なども、日本やアメリカの資料を用いて行った。

次に、東西両陣営の建設援助技法の変遷については、特にソ連の社会主義都市建設の様相を体系的に理解するため、キエフ、ミンスク、ワルシャワ、ドレスデンなど、旧東側諸国のなかでも第二次大戦で大きな被害を蒙った都市の現地調査を進めた。特に代表者や分担者と共同でボルゴグラートやブカレストなどを共同調査し、現地の大学機関の協力を得て資料を収集することができた。また、全体主義やファシズムと都市建設の観点からも現地調査を進め、ベルリンやローマなどで情報収集などを行った。

研究期間後半より西側諸国の建設援助および東南アジアを中心とした被援助国の現地調査なども計画していたが、コロナ禍が始まり、一気にそれらの調査研究活動は中断せざるを得なくなった。

４．研究成果

以上のような経緯から、本基盤研究 B の成果は、朝鮮戦争後に行われた北朝鮮の都市復興において、ソ連および東ドイツなどが中心になって行った主な建設援助の実相を把握できたことがまず挙げられる。特にソ連は、1945 年の日本植民地からの解放以後、北朝鮮を自国の影響が及ぶ地域ととらえ、いわゆる「高麗人」と呼ばれるソ連系朝鮮人を積極的に送り込んで建設活動を媒介させたり、北朝鮮の若い建築関係者を留学生として積極的に受け入れていた。こうした点を具体的な人物史とともに把握できた。また、朝鮮戦争後に平壌や咸興を中心にして建設されたアパートの建設事情やその背景などについても、ソ連や東ドイツとの関係で理解することができた。さらに、より大きな視点としては北朝鮮および韓国に投入された 20 世紀半ばの国際建設援助の概要を把握できたことに加え、関連資料を多く収集できた。

次に大きな成果としては、第二次大戦において徹底的な破壊を蒙った都市の復興が、ソ連の影響圏下でどのように進んだのかという概要を把握できた点である。特に代表者・分担者らで、現地ボルゴグラード建築・建設大学の研究者とともに議論や情報共有を行えたことは、その後の研究方針などを決めていく上で、非常に大きな成果となった。

また、韓国における国際建設援助については、象徴的なプロジェクトについて資料を集めることができたとともに、日本国内においても関連する資料を収集することができた。

以上のような形で進展を見ていたが、コロナ禍により研究期間の中盤から大幅に計画修正を余儀なくされた。特に朝鮮半島以外の地域における国際建設援助に関する現地資料収集やインタビューなどは滞ったため、本基盤研究 B は朝鮮半島における国際建設援助の概要理解までで一端整理することとした。そして本報告文の冒頭で述べたもう一つの可能性である北朝鮮の都市・建築史の一国史的な研究を軸にしながら、同時に本基盤研究 B で得た朝鮮半島をめぐる国際的建設援助関係に関する知見を用いて、一国史的ではあるが多元的に国際的動向に接続された北朝鮮都市・建築史を構築するための研究をデザインすることとした。それを次年度の研究最終年を待たずに前年度応募したところ採択されたので、本基盤研究は次なる研究へと接続することとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 冨田 英夫	４．巻 4
２．論文標題 東ドイツによる咸興とヴィンの戦災復興	５．発行年 2021年
３．雑誌名 九州産業大学建築都市工学部研究報告	６．最初と最後の頁 9～12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34488/kyusankenchikutoshi.4.0_9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一、クズネツォフ・ ドミトリー	４．巻 第86巻、第781号
２．論文標題 北朝鮮の都市計画家・金正熙――朝鮮戦争休戦（1953年）以前の履歴解明とその分析	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 1103～1113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.86.1103	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一	４．巻 1161号
２．論文標題 1958年、平壌・青年通りにアパートが建つ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 38～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷川竜一	４．巻 40巻
２．論文標題 日英水力による大井川の水力発電開発計画と北米西部開拓 ―森田一雄『南船北馬五十年』技術思想史―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 土木史研究講演集	６．最初と最後の頁 109～122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 TANIGAWA Ryuichi	4．巻 7
2．論文標題 ELECTRICAL ENGINEER KAZUO MORITA AND HYDROPOWER?HISTORY BEFORE THE DEVELOPMENT OF COLONIAL KOREA?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of JSCE	6．最初と最後の頁 91～99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2208/journalofjsce.7.1_91	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川喜田敦子	4．巻 92
2．論文標題 朝鮮戦争後の復興支援と国際関係 ―東ドイツの北朝鮮支援を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 人文研紀要	6．最初と最後の頁 321-342
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷川竜一	4．巻 51
2．論文標題 1930 年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制 ：「帝国の建設協働体」試論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際日本文化研究センター	6．最初と最後の頁 11 - 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15055/00007012	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Hideo Tomita	4．巻 18
2．論文標題 The construction of a socialist city by East German engineers in the late 1950s	5．発行年 2018年
3．雑誌名 International Planning History Society Proceedings	6．最初と最後の頁 506-514
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7480/iphs.2018.1.2705	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 複合的メディア戦略としての「普通江改修工事」――北朝鮮の脱植民地化のデザイン
３．学会等名 Cultural Typhoon 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川喜田敦子
２．発表標題 朝鮮戦争後の北朝鮮復興支援―東ドイツの咸興復興支援を中心に―
３．学会等名 公開ウェビナー「あらためて朝鮮戦争を考える：日本・東ドイツ・韓国・中国の視点から」（公益財団法人・日本国際問題研究所）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 1945平壌解放――ソ連兵や金日成の住まいとなった日本植民地期の住宅
３．学会等名 『通史的と通時的な東アジア住宅地形成』国際研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 20世紀東アジアの都市・建築に潜在するポスト・コロニアルな力学――北朝鮮の都市住宅建設を中心に
３．学会等名 『金沢大学国際文化資源学研究センター研究発表会』（第4回）
４．発表年 2021年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 北朝鮮の建国と朝鮮人建築家たち
３．学会等名 第3回　アジア建造環境200年史研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 「日英水力による大井川の水力発電開発計画と北米西部開拓 ―森田一雄『南船北馬五十年』技術思想史―
３．学会等名 第40回 土木史研究発表会
４．発表年 2020年

１．発表者名 川喜田敦子
２．発表標題 冷戦下の北朝鮮復興支援―東ドイツの関与を中心に
３．学会等名 ロシア史研究会、共通論題A「第二世界の東と西」
４．発表年 2020年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 解放前後の平壌における住宅地域とその構成
３．学会等名 国際学術シンポジウム『衣食住から見た植民地主義と冷戦』（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 谷川竜一
２．発表標題 1950年代の平壌再建と日本植民地支配/冷戦
３．学会等名 わたしたちのアジア都市・建築セミナー
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hideo Tomita
２．発表標題 The construction of a socialist city by East German engineers in the late 1950s
３．学会等名 International Planning History Society（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川喜田　敦子 (Kawakita Atsuko) (80396837)	東京大学・大学院総合文化研究科・教授 (12601)	
研究分担者	冨田　英夫 (Tomita Hideo) (80353316)	九州産業大学・建築都市工学部・教授 (37102)	
研究分担者	前川　愛 (Maekawa Ai) (30506796)	京都外国語大学・外国語学部・非常勤講師 (34302)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	玉田　浩之 (Tamada Hiroyuki) (70469112)	大手前大学・建築＆芸術学部・教授 (34503)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
わたしたちのアジア都市・建築セミナー	2018年～2018年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関